

社長への弔辞

(後継社長より)

本日ここに、○○株式会社、故○○○○社長の社葬を取り行うに当たりまして、心より哀悼の言葉を捧げます。

人生は「白駆の隙を過ぐるがごとし」と申しますが、百歳の齢をも期すべき有為の人は、余りにも蒼惶といしてわれわれの前から去つてしましました。

私事にわたつてまことに恐縮ではあります、○○氏は私にとりまして、旧制高等学校及び大学の先輩にあたります。かえりみますと、私が当社の只今の位置にありますのは、ひとえに○○氏の牽引力によるものであつたと、改めて深い感慨にふけらばにはいられないものであります。

学生時代は私などと比べますと、年の差より遙かに老成した、物静かな学究肌というべきお人柄であります。はからずも後日、氏の身辺近くにあつて共に仕事をするようになります、氏の実行力に富んだ経営手腕を目のあたりにするようになります。

然うして、私の氏への心酔の度合いは、更に深まつたのであります。
氏は、この○○株式会社の草創期に入社されました。戦後間もない混乱期で、その日の暮らしを支えるのがやつとという人々に、新しい文化の息吹を与えようとする分野の仕事がいかに困難であつたか想像に余ります。

氏が、営業担当重役になられましたのは、あのオイルショックの年であります。ほとんどがアイディアだけで勝負というこの業界にあつて、じつくりと長期の路線を敷いて真に社会が求めるものは何かということから、常に目を離されなかつた氏の方針は、いかなる時代に於ても拳拳服膺すべきであることを肝に銘じております。○氏は社長就任より○○年、今、脂の乗切つてきた時期であります。全てが社長を軸として回転していました。しかし今われわれは社長の死という冷厳な事実の前に、何をなすべきか「嘆きに溺れている時ではない」という、社長の叱咤の声が聞こえるような気がいたしました。これも会社が乗越えなければならぬ、ひとつつの危機なのであります。これまで闘い抜いてこられた社長の後継者たるには、その果敢さも受け継がなくてはなりませんまい。その覚悟のほどを表明して、ご靈前に捧げる誓いとする次第であります。

ご遺族の方々のお嘆きは、さぞやとお慰めの言葉も有りませんが、殊にご高齢のご母堂さまの、ご胸中はいかばかりかと、察するだけに痛恨の極みであります。なにとぞご健康新はご留意なさいまして、いくぶんなりともご氣力をはやく取り戻されることを、切に祈つております。

故人もさぞやお心に懸けられたことと存じますが、ご令孫方もりつぱにご成人になつてることでもござりますので、ご一族のご繁栄を楽しみに、将来を見届けていただくためにも、なにとぞご自愛ください。

遂に○○氏との永訣の時がまいりました。芳欄枯るるをとどめ難きは、浮生の慣い、今はただ、氏の魂の安からんことを祈るのみであります。

平成○年○月○日

○○○○株式会社



東海典礼

取締役副社長 ○○○○